



特別講座 京の庭師に学ぶ「和の庭」素材編

# 「緑陰」の言葉が表すように、植木は心を癒し、庭に四季をもたらししてくれます



「和の庭」案内人  
つだ ひでお  
**津田 秀夫**  
昭和22年生まれ。  
東京農業大学農学部造園学科卒業。  
株 植清・津田造園同社代表取締役。  
平成16年、京都府優秀技能者  
「現代の名工」受賞。  
現在、社 京都府造園建設業協会理事。  
京都府造園協同組合副理事長。

株 植清・津田造園は明治11年創業。京都府より『京の老舗』として表彰。津田さんが5代目となる。

「駒井さんの経営する駒井萬葉園は、とくに北山台杉・しだれ桜・椿が質量共にすぐれ、同業者の間の評価も高いですね。それに樹木医の資格ももち、木を熟知しています」

私・津田秀夫が案内人としてお送りしている「和の庭づくり」シリーズ、最終回は庭を構成する要素として「植木」を取り上げます。土を盛り石を敷いた庭に爽やかな息を吹き込み四季の情趣を味わわせてくれるのは、植木をはじめ草花や苔といった植物の力です。私の庭づくりのよきパートナーでもあり、京都で台杉や樹木を扱ってきた駒井正治さんとともに植木の種類と特徴、選び方をアドバイスします。



こまい まさはる  
**駒井 正治**  
昭和29年11月14日生まれ。  
東京農業大学農学部造園学科卒業。  
平成8年に樹木医の資格を取得。  
現在4代目として駒井萬葉園を経営。

駒井萬葉園は大正6年創業。北山台杉や庭園樹木の生産卸の会社で、造園設計施工も行う。京都の6千坪の敷地には500種類もの樹木が植えられている。地方の農場も合わせると敷地は3万坪にもなる。

## ただの木が手を加えて「植木」になる

植木の出荷作業をなさってましたね。

**駒井** 冬は植え替えの時期ですからね。

**津田** 「根回し」って言葉がありますよね。木を植え替える2~3年前に、根のまわりをあらかじめ掘って、太い根を何本か残し、あとは切ってしまう。そうすると切ったところから細かい根がびっしりと生えるので、あとで掘り上げて木枯れないんです。これが根回しです。

**駒井** そうですね。だから、山に生えている木を突然掘って植え替えても枯れてしまう。根を切って植え替えて、剪定して樹形を整えて、手間暇かけてようやくただの木が「植木」になるんです。ですから、とくに苗木から育てた木は、手塩にかけた娘を嫁入りさせる気分です(笑)

いい植木を選ぶポイントは何ですか？

**津田** 品質と樹形ですかね。いくら枝ぶりが美しくても、根回しがいいかげんだったり植え替えを繰り返した木は、結局枯れてしまいますから。その点、駒井さんとこの植木は、樹形の美しさもさることながら、品質

がしっかりしていて信頼できるんです。根巻きもどこよりも太く、鉢も大きい。だから運ぶのも植え替えもすごく大変だけど(笑)やっぱりあとあと健康だし枯れにくい。

**駒井** まあ、お尻は大きいほうが安産型だってよく言うじゃないですか(笑)

庭に植木を植えることの効果は何ですか？

**駒井** それまで石や土でモノトーンだった庭が、緑が入ることで劇的に変わりますね。木に限らず植物の緑は、見る人の心をなごませて癒してくれますし、心にゆとりを与えてくれる。

**津田** 木を植えることで四季おりおりの変化も楽しめます。モミジというすぐ紅葉が頭に浮かぶでしょうが、春先の新芽の美しさはまた格別です。葉が全部落ちた冬の姿も美しいものだし。

平凡な木も数本組み合わせると美しく見えますか？

庭に植木を上手にあしらうテクニックはありますか？

**津田** 前号の「石」の回で申し上げたように、木にも

別嬪(べっぴん)があります。それ1本で十分に主役を張れるような存在感のある木が。

**駒井** でもそういう木はなかなかないし、あっても値段が高くなりますね。

**津田** そうそう。だから別嬪1本にこだわらず、逆に1本では面白くない木を3本ぐらい組み合わせると、造形的に美しい景色をつくる工夫をする。バランスよく組み合わせることで美しく見える木は多いし、予算的にも安く済みます。

木を植えるさいに気をつけることはありますか？

**津田** たとえば京都ではなぜかシャラが合わないし、白樺も夏の蒸し暑さに負けてしまう。その土地の気候風土に合う木を選ぶ必要があります。

**駒井** 木は生きていますから、10年20年後を見越して、余裕をもって植えてください。寂しく見えるからといって詰め込むと、あとでジャングルになってしまうし、木もかわいそうです。

素材を吟味し、本物を見る習慣を

最後に、今回は最終回ですので、シリーズの締めくくりとしてアドバイスををお願いします。

**津田** 庭というのは机上の計画も大事ですが、実際につくっていくなかで、竹・石・植栽といった素材を吟味していくことが非常に重要です。できればそれぞれの素材のエキスパートに相談しながら、適材を選び抜いてほしいですね。

いい素材を吟味するためにも、日ごろから「いいものを見る」「本物を見る」クセをつけて、自分の目を肥やしていかなければなりません。

**駒井** 植木の場合、「ホンモノ」とは原種を見ることです。シャクナゲといたら洋シャクナゲでなく本シャクナゲを見る、というふうには。

**津田** 庭づくりも同じです。歴史のある古い寺や離宮の庭を見たり、また、ときには山奥の渓谷や小川を見て、自然のありようを感じ取ることも大切。そうやって感性を磨いていくことが、きっと将来につながると思います。

## 津田さん・駒井さんに教わる 植木のイメージと使い方

### 造形的な庭には松・槇・木斛 自然な雰囲気には紅葉などの雑木を

「松、槇(まき)、木斛(もっこく)」は庭の「主木」になる格の木で、きちりと造形的につくる庭に使われます。それに対して、自然で軽快な庭をつくるなら、紅葉(もみじ)、檜(けやき)、桜といった落葉の雑木を使うとよいでしょう。北山台杉は数寄屋造りの庭に調和します。椿は和にも洋にも使える重宝な木です。



つばき  
**椿**

冬枯れの時期に花を咲かせて、庭に華やきを演出してくれる貴重な花木。和だけでなく洋にも調和します。品種は3千種類以上。茶室の庭などによく使われます。華やかな紅妙蓮寺(写真左)は表千家で、楚々とした花姿の白玉椿(写真右)は裏千家で好まれます。

もみじ  
**紅葉**

軽やかで自然な感じの庭をつくるなら、この紅葉をはじめ柔らかいイメージの雑木を。落葉なので掃除が大変ですが、風が吹けば繊細な葉がさらさらと揺れ、春の芽吹き、秋の紅葉といった四季折々の楽しみがあります。



まき  
**槇**

庭の「主木」になる木。重厚で造形的な和の庭に合います。写真の槇は樹齢300年。どっしりとした落ち着きがあり、これ1本で庭のイメージを決定づけるアクセントになります。



しだれ桜

桜も紅葉と同様に、柔らかで自然なイメージの庭づくりに向きます。とくに京都はしだれ桜が有名。駒井萬葉園にはしだれ桜だけで8種類あります。こちらは樹齢60年。枝の美しい曲線も見事です。



きたやまだいすぎ  
**北山台杉**

京都洛北産の杉。枝打ちによって美しく端正な姿に育ちます。フォーマルなイメージがあり、数寄屋造りの家の庭に使うとすっきりと調和します。北山丸太の太いものは数寄屋の柱に使われますが、細いものは茶室の天井や、写真のように軒先の垂木に。



根巻きした山茶花の出荷。クレーンでトラックに乗せます。植木を動かすのは大変な力仕事。



京都の植木屋の道具。左が和ばさみ。右が切りばし。切りばしは京都だけのもの。

北山台杉の枝打ち。専用の鎌と枝打ちはしごで木にのぼり、余分な枝を落とします。はさみでは切り口がコブになってしまいますが、鎌を使用すると、切り跡の残らないきれいな肌の北山丸太が取れます。



京都山中にある萬葉園。振り向くと比叡山という好環境で樹木が美しく育っています。